

緊デジ（経産省コンテンツ緊急電子化事業） 文字入力ルール ver. 1.2

本ルールは緊デジの制作会社公募試作用に作成されました。
事業開始時の入力ルールでは変更される可能性があります。
最新情報を緊デジのサイトで確認してください。

2012年7月18日
(株) パブリッシング・リンク

Unicode 文字や異体字は、置き換えをせず、できるだけ底本と同じ文字を入力します。

ダッシュは全角の「—」(S-JIS 849F) を2字続けて入力します。

ローマ数字はそのまま入力します。

タイトルや段落内の複数のスペースは、全角スペースひとつに置き換えます。

物語としての文体／文体としての物語	I	3
文体としての自己意識		21
『浮雲』における物語と文体		58
表現の理論／物語の論理	II	96
結末への意志／結末の裏切り		127
結末からの物語		163
人称的世界の生成		195

文体としての物語	小森陽一	筑摩書房
----------	------	------

傍線は、左例では
★傍線：ヌツと★
と入力します。

のヌツと半身を提出して硝子
る……ザワくと庭の樹立
店間へ這入って手探りで洋燈

踊り字（くの字点）が含まれる場合は、以下例のように
「ザワ★くの字点：ザワ★と」
と入力します。

たづら髪二筋三筋扇頭の
く文三がシケくと眺めて
とした涼しい眼がデロリ

濁点付きの「くの字点」は、
「シケ★くの字点濁点：シゲ★と」
と入力します。

坪内逍遙作『一読三歎当世書生氣質』（明治一八）

組み文字はその内容をそのまま入力します。スペースは入れません。
左例：『一読三歎当世書生氣質』

「露呈化」することによる「小説
を見出しているが、我が国にお
特別な重要性を孕んでいる。

注番号は本文に挿入して入力します。
左例：「見出しているが（2）、我が国に」

入力したテキストは UTF-8 もしくは UTF-16 (Unicode) のプレーンテキストファイルで保存します。

めること、
は、
（一）聴き手も語り手と
（二）物語世界内

左例の場合は
（一）聴き手も
（二）物語世界
と入力します。

居間へ
ツと半身を提出して
ザワ／＼と庭の樹立
手探りで洋燈

ルビ（グループルビ）は、
半身を【ルビ：提出：はい】し
と入力します。
モノルビは、
居間へ【ルビ：這入：はゞい】って
と入力します。半角 [¥] マークを
字切りに挿入。

ヘッダー部分は入力しません。

物語としての文体／文体としての物語

—

物語としての文体／文体としての物語

あらゆる文学表現は、必ずしもその表現をつくり出した、個人あるいは個性としての表現者に帰属するものではない。もちろん、あえて言葉だけで構築した世界を、自分の表現として選びとろうとする個体には、そうせざるをえなかった個別の事情や理由、意欲や執着があることは事実だ。しかし、新たなテキストが、それまでの諸テキストの引用を基礎に成立する織物であるとするなら、現象している文学テキストは、必ず引用された諸テキストがかつて内包していた物語（あるいは諸物語）と、それを引用するテキストがこれから作動させようとする物語（諸物語）とが、縦糸と横糸のようになりながら織りなす生地であると同時にそこに浮き出る文様だ、といえる。

3

- ・ 旧かなづかいは原稿のまま入力します。
- ・ どうしても入力できない文字は1文字毎「=」に置き換えます。
- ・ () 類はすべて全角で入力します。
- ・ 1桁の数字は全角で、2桁以上の数字は半角で入力します。
- ・ 欧文アルファベットの全角半角は底本表記のままとします。

ノンブルは入力しません。

以下、上記を踏まえたサンプルです：

○ 文体としての物語 小森陽一 筑摩書房

○ 目次 ←

タイトル、目次や見出し部分は行頭
1文字下げします。

物語としての文体／文体としての物語 3

それぞれ前後に1行挿入します。

I

文体としての自己意識 21

——『浮雲』の主人公——

『浮雲』における物語と文体 58

表現の理論／物語の論理 96

II

結末への意志／結末の裏切り 127

——嵯峨の屋おむろにおける物語と表現——

結末からの物語 163

——「舞姫」における一人称——

人称的世界の生成 195

——鷗外ドイツ三部作における文体と構成——

(中略)

物語としての文体／文体としての物語

—

あらゆる文学表現は、必ずしもその表現をつくり出した、個人あるいは個性としての表現者に帰属するものではない。もちろん、あえて言葉だけで構築した世界を、自分の表現として選びとろうとする個体には、そうせざるをえなかった個別の事情や理由、意欲や執着があることは事実だ。

しかし、新たなテキストが、それまでの諸テキストの引用を基礎に成立する織物であるとするなら、現象している文学テキストは、必ず引用された諸テキストがかつて内包していた物語（あるいは諸物語）と、それを引用するテキストがこれから作動させようとする物語（諸物語）とが、縦糸と横糸とのようにからみあいながら織りなす生地であると同時にそこに浮き出る文様だ、といえる。